

## 100周年記念シンポジウム

# 『ロータリーの理念を再認識しよう』

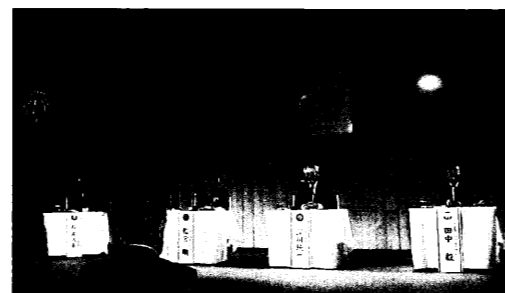
～ 奉仕の一世紀・実りの新世紀～

パネラー RID2680パストガバナー 深川 純一

RID2680パストガバナー 田中 毅

RID2780ガバナー 松宮 剛

進行 地区代表幹事 石井 鴻平



司会進行(石井地区代表幹事)：それでは大会のシンポジウムを開催させていただきます。松宮ガバナーはこれを大変楽しみにしております。本日はお二人のすばらしいパネラーをお招きしております。もちろん当地区、松宮ガバナーもすばらしいパネラーとなっております。私は、時間の進行と皆さんへのお声かけをさせていただき役でございますので、本日はよろしくお願い申し上げます。

それではパネラーの深川純一パストガバナーと田中毅パストガバナーをご紹介します。

まず、深川純一パストガバナーの略歴をご紹介します。所属クラブはR I 第2680地区伊丹ロータリークラブでございます。お生まれは1930年2月14日、職業分類は弁護士さんでいらっしゃいます。1990年7月に、旧のR I 第268地区ガバナーをお務めになられ、その後広く活躍され、当地区の地区大会のR I 会長代理も実はお務めになっていらっしゃいます。その他、2710地区、2800地区、2600地区などのR I 会長代理をお務めになられ、大変ロータリーに関しましては造詣の深い方でいらっしゃいます。当地区には、深川先生が講演された職業奉仕の冊子とか社会奉仕の冊子が現存しております。

次に、田中毅パストガバナーですが、

1933年のお生まれです。やはりR I 第2680地区の芦屋川ロータリークラブにご所属でいらっしゃると思います。1996～97年度の2680地区ガバナーをお努めになられ、現在は米山記念館評議員をお努めです。2001年の規定審議会代表議員、そして2004年の規定審議会代表議員としては座長もお努めになられています。そのほか、沢山のお役をやっておられ、特にR J W (ロータリー・ジャパン・ウェブ)の委員長をおやりになり、現在はご自分のホームページ「ロータリーの源流」を主宰しておられます。このホームページは、今、多くのクラブがそれを期待しています。あるクラブの会長さんは、会長報告にはそこを開いてお話の題材を求めているという話もありました。「ロータリー情報とロータリーエッセイのとても素晴らしいホームページ」をおつくりになっていらっしゃいます。

もうひとつ、松宮パネラーでございます。もう十分ご承知のことと思います。当地区の3本の指に入るといふロータリー理論家でございます。

本日は、このお三方を中心として、楽しいロータリーのお話になるのではないかと考えています。それでは最初に松宮ガバナーから基本スピーチをお願いします。

松宮氏：はい。こんな大それた企画というのが



成立するのかどうかということは、非常に危惧はしていたのです。けれども、こうやって実現しますと、逆に私がどうやっていいのかわからないような状況です。今、元々の考えはどうだったのかと自分を問い直さなければいけないような状態であります。

今年度はご承知のように100周年ということで、それぞれに100周年の意味を問うということ、各クラブ、各ロータリアン皆さんがおやりになっていると思います。先ほど菅生浩三R I 会長代理がなされたお話の中にもありましたように、何ゆえロータリーがここまでの命脈を保ってきたかということについていくつかの解説がありました。ちょっとしっかりメモをしなかったので、いい加減なのですけれども、皆さんにとっても非常に意味の深いお話だったことと思います。で、今まで皆さん方のクラブへ、33クラブもう既にお伺いいたしました。どのクラブも本当に特長がありまして、そういう点でいかに公式訪問というものが楽しいものであるかということは、月信の3号を通して書かせていただきましたけれども、その思いは本当に今でも変わりません。

地区大会でくたびれないようにして、また後半の公式訪問に取り組んでゆきたいと思っておりますが、各クラブを訪問いたしまして私が一番、感じましたことは、地区の活動のあり方とか、それからRIの方向性とかに対して、私自身も批判したい部分は数多くございますので、「単に批判する」と言うことは誰にとっても概して容易であると。しかしな

がらそれこそアナハイムにおけるラタクルさんのお話じゃないですけども、内側をしてみるということ。外に対していろいろ言うことは簡単なのだけれども、それじゃあ我々自身はどうなのだといいところ、そこをところをぜひとも見直してみたいということです。そういうことを各クラブに、あるいはお一人お一人のロータリアンに呼びかけております。何度も皆さんと懇談をいたしまして楽しい思いをしてきたわけですけども、気になることが幾つもあります。まず欠けていることと感じましたのは、やはり島国であるからかもしれないけれども、各クラブが、ほとんどR Iの会員としての自覚と責務というところが非常に抜けているのではないかと思います。それは日本のロータリークラブ、単に2780地区だけではなくて、共通の問題ではないだろうかと考えられます。そうでなければ、そう安易な休会とか例会の移動とか、そういうことは行われるはずがないという風に思うからです。厳しく言えば、国民の祝日というのは、日本独特のものでありまして全世界のロータリアンにとってはあまり関係のないことでありますから、日本で国民の祝日だから自動的に休会にしてしまうというのは、RIの会員としてはよろしくないのではないかと。やはりその責務を自覚した上で結果としてそうなるのはいいけれども、基本的な会員としての自覚がないうでやっつけてしまっているのではないかと。一方たとえば逆にいいますと国際ロータリーレベルの大会への参加については、国際ロータリーの会員であると言う自覚の下に、やはり当地区もまだまだもっと活発に参加すべきではないかとも思います。ま、そんなところが一つ。

それから、推奨クラブ細則というのがございますけれども、これは単に推奨されるにすぎないと書かれています。国際ロータリー定款、細則、それから標準ロータリークラブ定款に矛盾しないかぎり、なるべくそのクラ

ブに合った細則というものが必要だと思えますし、そういうものを皆さんのクラブの中でお作りいただきたい。日頃の活動とその基本的なクラブのルールが乖離してしまいますと、ルールに対して結果的に無関心な人たちを育てているような気がいたします。つまり、あまり厳しいことに触れては日常の活動に対して悪いし、執行部に悪いということで遠慮してしまう。で、そういうその遠慮がずっと続いていくと、これは単に遠慮ではなくて一つの不満に変化していく。そういうよどみが皆さんのクラブの中で、勿論私たちのクラブにおきましてもあるのではないかと。だから何かちょっとしたきっかけがあればやめようという、その退会予備軍というのが、今非常に多いような気がいたします。そうした観点からも活動と結びついたクラブ細則を自分たちのものとして作るの意味は大きいのではないかと思います。

それから、クラブ例会は先ほど申しましたように、RIの会員たるクラブの責務として、世界中のクラブならびに全ロータリアンに知らされているわけですから、また例会は、全世界のロータリアンがメイクアップできる唯一のクラブレベルの公式会合でありますから、クラブ協議会やクラブフォーラムが例会のプログラムになっているというのはおかしい。クラブ協議会というのは、その年度における執行部の方針であるとか、それから活動の計画とかを協議をしたうえで定め、実施に移していく。まあ最終的には理事会の議を経て実施するということになるわけですが、協議というものが行われないクラブ協議会がかなり増えているような気がします。やっぱり協議してこそ、会員がいろんなことを発言することが出来るなら結果的に違う方向に定まっても、自分として言うべきことが言えたということによるその一つの開放感といいますか、そういうところから活動や、執行部に対する、または会員に対する信頼関係も生まれてくる

だろうと思うのですが、十分な協議がなされず単なる報告に終始してしまいますと、「会員にとってのガス抜き」という役目も果たしていない。クラブの活動にはもともと協議会やフォーラムというツールが、ある意味戦略として用意されているわけですから、ぜひともそういうものを使って欲しいなあと、そんなことも思います。

それからロータリークラブの最もその性格付けをあらわしているものは、予算書を見ると明らかになるのではないかとというのが私の以前からの考えです。というのも我々は年会費を何に対して払っているのかということを見れば明らかである。これは、人頭分担金であるとか、地区負担金であるとか、それからクラブの運営費、それから食事代、それからまあ各種委員会費というものを除けば、勿論これらも結構な金額になるには違いないのですが、他はすべてクラブ親睦のために使われている、それはご承知のとおりだろうと思えます。それでは奉仕活動の財源には何が使われているかといいますと、これはほんとにささやかな、当てにならない、スマイル、ニコニコですね、ニコニコの前年度までの実績が今年度の奉仕活動、クラブとしての奉仕活動の予算になっていくわけです。つまり当てにならないものを財源として、奉仕活動をささやかにやっているのがロータリークラブなのです。ロータリークラブは社会奉仕団体である」と声高に地域社会に対して言えるでしょうか？ 僕は言えないと思うのです。その構造から見てとても言えない。クラブ親睦のために会費を皆さん払っているわけですね。そういうところ、クラブにおける活動を資金面から見ますと、見事にロータリークラブの性格と言うものがあらわれていると思えます。そういったところをもう一度ご理解いただいてロータリークラブというものを見直していただきたい。

それからロータリークラブは退会者に対し

て冷たいというご意見が公式訪問の場で多くありました。辞めた方に対してロータリークラブは何の手法も持っていないと言う事実があると思います。声掛けをすとか、案内を出すとか、そういうマニュアルはありませんから。一方冷静に見て、毎週、忙しい職業人が週一回、一堂に会して、それも50人、100人という大勢の人たちが一堂に会して食事を共にするという仲間活動というものは、それだけで稀有のものだと思います。ま、それほどの仲であった、昔はロータリアンといえば家族も同然という風に言われた仲でした。それがやむを得ず辞めた方に対して、なんとなく音沙汰をしないうちに時間が経過してしまう。年度が変わります。会員名簿からその方の住所や名前が無くなると、儀礼的な年賀状も頂けなくなる。これは、こちらが作為的にそうやっているのではないのですが、結果的としては、裏切られたような感覚を、辞めた会員は持ってしまう。で、辞められた当初はやっぱりいい思いがありますから、なんとかなれば戻ろう、もしくは自分が戻れなくても、ほかの私の友人をあのクラブに紹介しようという気持ちがあるだろうと思うのですが、そういう気持ちが、裏切られたような感触持つということになりますと、それから何らかの声をかけたとしても何の効果もありません。辞めた当人だけでなく、その人を取り巻く周辺の人たちも増強の対象にならないような状況になる。だからそのそういう意味で、仲間であったということは、仲間ではなくなって友達として、精神としての家族というものを展開していけるなら、もっともっと基本的なクラブの充実に貢献できるのではないかと。そしてこれも所謂ロータリー家族委員会の任務の範疇に入るのではないかと思います。

いろいろありますが、まあそんなところでひとつ、話を終わりたいと思います。いろんなところで起爆剤にさせていただいてお話をいただければありがたいと思います。

司会進行：ありがとうございました。表題が「ロータリーの理念を再認識しよう」という大きなテーマを掲げてしまったものですから、その取り扱いが大変です。松宮ガバナーとは再三、再四打ち合わせを重ねたのですが、なかなか私が捉えきれません。そこで大変申しわけありませんが、身近なところから追って、理念というのはどういうことなのかというお話をいただこうと思っています。

まず、話によく出ます「親睦」という言葉、ロータリーでいう「親睦」という言葉について、深川先生お願いいたします。

深川氏：2680地区の深川でございます。ご覧のとおり若輩でございます。ひとつよろしくお願いいたします。

先ほど、RI会長代理の菅生先生がロータリーを7つの点に分けて見事に分析をされまして、私が今更付け加えるところはないかと思いますが、若干、視点を変えて、そしてまた次元の低い話も交えながらお話を申し上げたいと思います。

ロータリーの「親睦」につきましては、元来、ロータリーには指導理念というものがございまして、それは「親睦」と「奉仕」という2つの概念で集約できると思います。

そこで、ロータリーの親睦というのは、本来は感性的な親睦、例えば、お酒を飲んだりゴルフをしたりして楽しむ、そのような意味のものであったのであります。このシンポジウムというものも、本来の意味は、古代ギリシャの酒宴のことでありまして、「お酒を飲みながら語り合う場」であります。今日、こ



ここに水割りらしきものがありますが、これは実は水であります、まあ焼酎の水割りのつもりで話をしたいと思います。

ところで、「親睦」と言われると、つい、お酒を飲んだりゴルフをしたりして楽しむことだと考えがちであります。まさに1905年時点での「親睦」というものはそのような「感性的親睦」であったと思うのであります。

ただ、ロータリーというものは、親睦と同時に助け合い運動でもございました。即ち、職業上のいろんな悩みを交換しながら助け合っていく。そして、みんなが仲良くなっていく。そして1907年頃になりますと「ただ助け合っただけでは駄目だ、世のため人のためのことを考えよう」という考え方が出て参りました。

単なる感性的親睦だけでなく、例会で企業経営上のアイデアを交換するようになり、更に世のため人のためのアイデアも交換するようになりました。このようにして会員同士がお互いに精神的に高めあう、心を高めあう、これこそロータリーの「親睦」とあるという考え方が出てまいりました。これを「感性的な親睦」に対して「精神的な親睦」と申し上げてよろしいかと思います。

「感性的な親睦」即ち、とにかく楽しくいければいいよ、という考え方であれば、これは何もロータリー独自のものでもございません。ロータリアン以外にも、一般地域社会の人達でも楽しみを分かちあっているわけであり、極端なことを言いますと、暴力団でもゴルフもするし、お酒も飲んで、「感性的な親睦」の場をもっているわけであり、

したがって、ロータリーでいうところの「親睦」というのは一体何かというと、これは「精神的な親睦」のことなのであります。単に楽しければよいというだけではなく、お互いに会員同士が接触することによって自分を高めていく、そういう「精神的な親睦」のことを意味するのではないかと私は理解して

いるわけであり、

この「精神的親睦」は、ロータリーにとって一番大事なものでありまして、お互いに学び合っ、自らを高め合っていくことによって、やがて職業上のアイデアの交換とか、奉仕のアイデアを交換する、という機能が高まりまして、ロータリーが1905年できてから22年後の1927年、ロータリーは「職業奉仕」という類まれなる概念を生みだすに至ったわけであり、

ところで今、そのようなことを振り返りながらロータリー100年の歳月を閲しますと、次第に「精神的な親睦」というものが忘れられて、今また「感性的な親睦」をロータリーの「親睦」だと考えるような風潮が出てきたように思います。この辺が私達の反省すべき大切な問題ではないかと思っているわけであり、

ロータリー本来の「親睦」というものを取り戻すためには、ロータリーはクラブが主体でありますから、クラブの自治権というものを確立する必要があるのであります。自治権の問題につきましては、また後で議論が出るかも知れませんが、とりあえず「親睦」ということを尋ねられましたので、これで終わりたいと思います。

**司会進行：**ありがとうございました。クラブで「親睦」といいますと、どうしても「楽しむことが中心」ということになりがちです。今おっしゃられたのは、クラブでその奥にあるもの、「精神的な親睦」を求めていかなければならないというように思われます。松宮ガバナーが本年度クラブに対してクラブが成すべき事というのを提唱されています。それはクラブの主体性、そして自治権ということですね。この辺を田中先生お話いただけますか。

**田中氏：**はい、わかりました。2680地区の田中でございます。

深川先生が若輩だと言われてしまいますと、私は若輩の3乗くらいの若輩でございます。

70を越しておまして、若輩と言わざるを得ないロータリーの高年齢化ってことに対して、なんとかもうちょっと引き下げることが必要じゃないかなと考えております。

私も実は深川先生と同じようなグループの中で勉強している関係上、私の話は、深川先生が先に言われたら、「深川先生の言うとおりです」と頭を下げるしか方法ないので、それではシンポジウムになりませんから、若干、深川先生に逆らって話をしてみたいと思うわけであり、

現在、ロータリークラブの定款・細則、それからRIの諸規定の中から「親睦」という文字を拾おうと思って探してみても、決して出てこないです。僅かに「親睦活動」という言葉が細則の中に出てきますが。そういう意味では、現在のロータリーから「親睦」は無くなっているのです。ところがロータリーができた発端を考えたら、まさしく「親睦」のために集まった団体ですよ。1906年に最初の定款ができて、そして1912年までの定款には、ロータリーの綱領の中にはっきりと目的として「親睦」が入っていたのです。「会員の親睦を深める」とはっきり定められています。13年からは「親睦」の文字が消えて、22年からは「知己を、知り合いを広める」に変わっちゃったのですね。ですから、逆に考えれば、今ロータリーの目的が「親睦」だと考えるのは間違いだと言えるわけです。現在のロータリーの目的は「親睦」ではありません。ただし「親睦」が崩れたらロータリー運動は壊滅しますから、前提だと考えた方がよいのではないかと思います。最初にロータリーができたときは、「親睦」が目的でした。だからその「親睦」を阻害する要因は排除しよう、ということで最初生まれたルールが「一人一業種」です。そんなことを考えながら、現在のロータリーの「親睦」を考えれば、決して、「お酒飲みに行くこと」でも「ゴルフに行くこと」でもない。ロータリーの創立



当初のことを思い起こせば、「ロータリーの親睦」とは「どんなことでも語り合える仲間づくり」ではないかなと思うのです。現在は「一人一業種」は崩れてしまって、同業者が入ってきている。それから物質的な相互扶助も無くなってしまったから、その意味でのメリットは無くなったのかもわからない。しかし、一番問題なのは、クラブの中で「どんなことでも相談できる」という雰囲気が無くなってしまったことです。これが、「クラブの親睦」が薄れていく一番大きな原因ではないかと思うわけであり、

次に、ロータリークラブの自治権についてです。元々クラブが存在して、それらを連絡調整する機関として、あるいは拡大を担当する機関として、全米ロータリークラブ連合会ができ、それが順次発展していきながら、今のRIに発展してきたわけですね。ですから、このような権限を除けばロータリークラブとRIとはまったく同格なものだと考えていくことが必要です。またクラブが勝手気ままに行動していたら、ロータリーという組織はうまく機能しませんから、クラブがRI定款、RI細則、標準ロータリークラブ定款に違反した場合のみ、RIはクラブに対していわゆる懲戒権を発揮できるのだということになっている訳です。しかし、これらの三つの規約に違反しない限り、クラブは自らのクラブの自治権を発揮することが可能なのです。案外そのことを知らずに、RIからの命令に従って動かなければならないという風潮になってしまっているのは、非常に寂しいことです。

推奨ロータリークラブ細則がありますが、これは、あくまでも100人か200人かのクラブを前提として作った、ひな型にすぎないのです。ですから、日本のような、40名か50名のクラブで推奨細則をそのまま適用したのでは、クラブ運営がうまく行きません。自分のクラブの現況や会員数にあったような細則を、毎年クラブで作ることが必要です。自分のクラブが40名だったら、40名という会員数に併せて、どういう委員会を構成したらうまくいくのかを考える必要があります。一人の人が4つも5つも委員会を兼任していたり、一人委員会だって、うまくいくはずはありません。それならば思い切って委員会数を5つとか6つとかに統廃合することも可能です。そういったことを考えていくことが不可欠だと思います。

それから今「一人一業種」の問題が提起されましたが、2001年の規定審議会ですらそれが緩和されました。従って、うちのクラブは「一人一業種」にすると決めれば、それは定款違反になります。しかし、実質的に「一人一業種」を守ることは可能です。入会手続きは全部クラブ細則事項ですから、クラブの中で不満が起らないような方法を考えながら、入会を勧めることも可能なはずですよ。

毎年会長さんが変われば、クラブの運営方針も変わるはずですよ。だから、クラブ運営方針の変更を先取りして、自分のクラブに合った細則を作りながら、それに従ってクラブを運営していくという努力がぜひとも必要なのです。

**司会進行：**ありがとうございました。

それでは松宮ガバナー。クラブの自治権ということで、いま「細則」の問題が出てきました。例えばクラブが適正人数を自分のクラブで決める、そのことが結局は増強につながるような気がしますが、その件について、細則を整備するということも含めて。

**松宮氏：**そうですね。私は結局ハウツーとして

の退会防止であるとか、会員増強の方法であるとかということ以前に、今お話が出ましたクラブ細則を、そのクラブの身丈に合うようにみんなで作っていく。そういう作業も非常に活動的な行為であろうと思います。公式訪問で各クラブに対して共通にお伝えしていることというのは、そういうことを見直していただいて、しっかり基礎を固めなおす。例会とクラブ協議会とクラブフォーラムは別に持つということも含めて、クラブ細則は身丈にあった自分たちのクラブの細則だといえるのであるならば、会員の身近にあっていつでも見えるばかりでなく、活動や運営とも有機的な関連が非常に強くなっていく。そういうことが、クラブを生き活きさせていく一つの大きな理由になると思います。そういう言わば生命力を、あらためて獲得いたしますと、増強のこのみに、もしくは一所懸命辞めようと思っている人の袖を引っ張ってみたいというようなことに奔走しなくても、またアットホームな精神としての家族、そういう気持ちをはっきり会員に自覚されていくなれば、それは必ずクラブ充実につながると思うのです。そしてクラブが充実するということは、結果的には皆さんがそこにいることを良しと考えることになると思うのです。「私はここにいていい」という、その思いが外に対して見えるようになりなれば、これは大きな増強の力、増強のための力になっていくと考えます。そういうことで増強につなげていくのが、本来のクラブの在り方ではないかと考えます。外に対して批判をする以前に私はどうしても内側を見ていただきたいという思いが強い。それが大前提です。先ほど田中さんがおっしゃいましたように「親睦」はいわば、すべての前提になっているけれども、これなしではロータリークラブらしい活動は、本当に展開できないと、そのように思います。

**司会進行：**「親睦」が例会の場で一番重要視される。その例会はクラブが開く。そして、ク

ラブは、自治権を持っている。その自治権の中の一つの現れが「クラブ細則」である。ということで「親睦」、「例会」それから「クラブの自治権」ということになりました。このように展開は一見バラバラですが、最後にパネラーにまとめていただくつもりでいます。具体的な例で、何か会場から質問がありましたらどうぞ、何でも結構なのですが、素朴な意見でも結構です。何か会場からありましたらどうぞお手を上げていただければと思いますが。

**松宮氏：**ご意見があればいつでもどんなタイミングでも結構ですので、私たちがやりました公式訪問のフォーラムのように、どうぞご発言ください。「クラブ自治権」に就きましては、RIとクラブとの関係で皆さんのクラブを回りますと、RIや地区の要請という受動的な捉え方をすると、そうしたプログラムで年間が埋められてしまって、自発的な活動というものができない。そんなご意見もありました。

**司会進行：**

それでは時間も少しすぎました。もしありましたらどうぞお手を上げていただきたいと思います。あっ、田中パネラーどうぞ。

**田中氏：**はい。自治権についての付帯説明ももういっぺんしてみたいと思います。自治権、自治権と申しますと権利だという風に誤解するのですが、本当は権利であると同時に義務でもあるということです。たとえばRI会長がテーマ出します。それからガバナーもいろんな要請をします。RI理事会からも要請が参ります。そういう要請がもし来た場合に、それをそのままクラブが忠実に実施しなければならぬかということ、これは、クラブ自治権に従ってノーと言えるわけですよ。また、RIの目的の中に「拡大」という項目がありますから、RI会長は必ず「拡大」を強調されます。田中（作次）理事さんも「拡大」のことを言われるはずでし、ガバナーもRIの役

員ですから「拡大」を強調します。ただそれを受けるか受けないかということ自体はクラブの自治権なのです。ただ問題は、逆に、RIがどんどん言うてくる要請を、クラブの自治権を楯にして、反発するクラブが最近非常に多いことです。RIが要請する奉仕プロジェクトは、全世界のレベルで、そのニーズを考えながら見つけた価値あるサンプルなのです。それをクラブとして拒否することは可能です。しかしそれを拒否するならば、それに勝るとも劣らない素晴らしいプロジェクトを、クラブが開発してそれを実施する義務があるのです。ロータリーの哲学は実践哲学ですから、実践が伴わなければ、それはロータリーではありません。ですからRIの言うてくることを拒否し、ガバナーの言うことも拒否し、そのくせクラブは何にもしないというのでは、まったくクラブの存在の意味がないのだということ強調したいと思います。そういう意味で、自治権という権利は、奉仕活動の実践と言う義務と裏腹のものだという風にお考えいただきたいと思います。

**松宮氏：**お話を伺っていてまさに今、この地区内の一つのクラブを思い浮かべますと、その逆の状態があるのです。これは或る意味で好ましいことなのだろうと思うのですけれども。そのクラブが非常に主体的な活動をしている。要請されたことではなく、自発的な活動をし、自分たち自らニーズを見つけて、それに対する対応、手法、資金面、そういったことをすべて、主体的な活動の中でやっている。だから、「押し付けはごめんだよ」というクラブもよい意味で逆にあるということなのですが。こういうところに対して私がRIの役員という立場からしますと、どのような説得をしたらいいのかということになるのですが。まあ一つには両者の「協調」ということにもなるのだろうと思うのですが、多少それは弱いかなあと。むしろそういう自発的な活動をされているクラブのあり方にこそ敬意

を表したいとも思います。そうしたクラブは会員それぞれがロータリーに対して自覚的な、理論を持って活動をするという、そういう望ましい状態あるのですね。しかしこれがまた、却って厄介だという部分も、実はある。そのらのことを、いらっしゃると思いますが、茅ヶ崎中央ロータリーのどなたか発言していただけますか？

深川氏：発言がなければ私が少し補充をしたいのですが…

司会進行：はい、どうぞ。

深川氏：自治権のことについて補充をしておきます。クラブ自治権というのは堅苦しい言葉ではありますが、くだけて言いますと「自分たちのクラブの管理・運営は自分たち自身が決める」ということであり、もっと平たく言いますと「自分たちのクラブのことは、自分たちが決める」ということなのであります。これを「クラブ自治権」と言っているのですが、それでは「クラブ自治権」の根拠規定は一体何処にあるのか、と言いますと、これは標準クラブ定款の第9条に「このクラブの管理主体はこれを理事会とする」という規定がございます。これはロータリー組織管理の大黒柱的な規定でございまして、国際大会の決議によって採択されたクラブ自治権確立の大原則なのであります。これは、クラブの自主独立性を保障した無条件絶対の規定なのであります。したがって、国際ロータリーといえども各クラブの自主独立性を侵害することはできないわけでありまして、それほど強い権利なのであります。そのような自治権をもったロータリークラブが集まりまして国際ロータリーという連合組織体を作っているわけでありまして。

このように、ロータリークラブは自治団体であります。そして、そのクラブの連合体であります国際ロータリーもまた自治団体であります。お互いに自治団体と自治団体でありますから、意見が衝突する場合がございます。

そこで、それをどのように調整するかという問題が一つ出てくるわけでありまして。

国際ロータリーもやはり自治団体として、独自の立場でクラブに対する「直接監督権」というものを持っているわけでありまして。そうすると自治団体同士の利害が衝突した場合、どちらが優位するかということになりますが、国際ロータリーの定款第3条には「直接監督権」の規定があります。したがって、これと標準クラブ定款第9条の「絶対的自治権」の規定との関係をどのように調整するかという問題になります。

両者の衝突する場面をどのように調節するか、これを解決したのが皆さんご承知の1923年のセントルイス国際大会における決議23—34号第5項なのであります。

この第5項は、各ロータリークラブは、「絶対的な自主独立性を有する、絶対的自治権を有する」と規定しています。つまり、この規定からいきますと、標準クラブ定款の第9条が中心である、ということになるわけでありまして。即ち、先ず各クラブがあつて、初めて国際ロータリーがある、という考え方でありまして。これは、無条件絶対なのであります。一切の但し書きはございません。そして、第5項には、このような「絶対的な自治権」の内容を分かりやすくする説明がついています。曰く「国際ロータリーは、積極的・消極的な意味において、いかなる奉仕活動にせよ各ロータリークラブに対して命令する権限を有しない」といとも明解に規定しているわけでありまして。

しかし、これでは国際ロータリーの直接監督権、すなわち各クラブに対して「指導と助言」を与える立場というものが、原理的に成り立たなくなってくるわけでありまして。

では、これとの調和をどのようにすればよいか、という問題になるわけでありまして、結論だけ申し上げておきますと、ロータリークラブといえども無制限な自治権を主張する

ことはできません。やはり、クラブの自主独立性を実質的に育てるためには、お互いに謙虚に頭を垂れて、国際ロータリーや他クラブの経験に学ぶ姿勢をもたなければならない。

このように考えて標準クラブ定款の第9条「絶対的な自治権の規定」と国際ロータリー定款第3条の「直接監督権の規定」とをうまく調和することができるだろうと決議23—34号は説いているわけでありまして。これが「原理論」なのであります。

ところで、この原理を現実の問題に当て嵌めるとどうなるか、と言いますと、例えば、国際ロータリーは各クラブに対して会員の増強を要請いたします。会員を増強しロータリーを拡大するということは、国際ロータリーの義務なのでありますから、当然、会員の増強を要請してきます。

そこで、各クラブとしては、先ず自分のクラブの会員数の適正値が大体いくらであるかということをもつて考えてみなければなりません。自分たちのクラブの会員数は、50名が適性値だと判断しており、既にその適正値に相当する会員数があるのであれば、国際ロータリーがそれ以上の会員の増強を要請してきても、それは丁重にお断りすればよろしいのです。

しかし、現に30名しか会員がいないということになれば、これはやはり謙虚に頭を垂れて国際ロータリーの要請を受け入れて、会員の増強の努力をしなければならないと思います。このようにして、クラブの良質な自主独立性というものが保障されるのではないかと私は考えているわけでありまして。

司会進行：いわゆる「権利と義務」とは表裏一体なのでしょう。先ほど、菅生RI会長代理がロータリーに関し7つの項目をお話されました。その中の5番目に、「ロータリーはクラブ、地区、RI、この合理的組織が成り立っていて、そのことが100年という長い間永続した要因の一つ」とおっしゃっておられ

ました。これは松宮さんがガバナ一月信で似たようなお話をされています。「クラブが、きちんとした自治権を持って、きちんとした組織を持ってやらないと、ロータリーは発展しない」というようなことを言われています。

さて、これまで出てまいりました「親睦」という言葉と、どうしてももう一つ、どこに置いたらいいのか「奉仕」という言葉があります。深川先生、「親睦と奉仕」を繋がりといひますか関連付けてお話しいただけますか。

深川氏：「親睦と奉仕」というのは、私はロータリーにおける二つの指導理念であると理解しています。「親睦」というのは、先ほどRI会長代理もおっしゃいましたように、結局「親睦」と「奉仕」は同じことになるのではないかなと思います。「親睦」というのは、会員相互の助け合いであり、その結果として企業が繁栄していく。会員同士が仲良くすることから、やがて世のため人のための奉仕を生みだしていったと考えられると思います。「親睦と奉仕」の関係と言ふと、ちょっと質問の趣旨がよく分からなかったのですが。

司会進行：はい。「奉仕」といいますと、ロータリーは職業奉仕が主体という話になりますが、「親睦」と「職業奉仕」との繋がりでも結構でございますが。

深川氏：最初に少し触れたと思いますが、「親睦」というものは、お互いに助け合って仲良くしていく、その助け合いの「親睦の効果」として、ロータリアンの職業が栄えていく。そして、単に栄えていくだけではなく、栄えていくに従って、ロータリアン達は企業経営上の色々なノウハウを開発しました。それから、世のため人のために奉仕するにはどうすればよいのかという奉仕のアイディアも開発していきました。このように「単なる助け合い」から始まって「職業の繁栄」、それと共に「世のため人のための奉仕」ということも考えようという考え方が重なってまいりました。このような企業経営の考え方と実践に対

して、ロータリーが始まって22年後の1927年になって、それを「職業奉仕」と名付けたと考えてよろしいのではないかなと思います。司会進行：ありがとうございます。会場の方に少しお話をいただければと思います。いかがでしょう、ご参加の方、どうぞ何かご質問がありましたら。

**松宮氏**：先ほどの話をちょっと。あつ、会場から意見があるみたいです。どうぞ。

**質問者(茅ヶ崎中央RC堀川会員)**：茅ヶ崎中央ロータリークラブの堀川でございます。田中先生と深川先生がいらっしゃる前で、私がお話をできるなんて、こんな光栄なことはないと思います。ロータリーについてWEBで毎週毎週見て、よくこれだけの時間を田中先生は持っておられるなど、非常に不思議なのですね。なぜこんなにロータリーに情熱があるのだらうと。先生ほどでなくとも情熱のある方が、各ロータリークラブにいらっしゃれば、ロータリーはもっともっと良くなっていると思うのですね。

昨年、ロータリー財団の奨学生を私たちのクラブで出しまして、そのときに思ったことは、クラブの中でロータリー財団と米山奨学会がほんとうに分かっている方がどの程度いらっしゃるのかと。混同している方もいっぱいいらっしゃるのですね。そんな中で、財団に200ドル、米山に2万円出ささいというような要請をしても、それはただの寄付になってしまうのですね。それではロータリーの基本、「入りて学び、

出でて奉仕せよ」ということに通じるとは思えないのです。やはり自分たちが、その事業を通じて体験したことをもとに寄付を出すということ



が、非常に大切なことであると思います。昨年我がクラブは、ネパールからランジュという女の子を迎えて、我々のクラブの活動として事業をやりました。それは我々のクラブ予算の中でやったのですが、こういう活動を通じて、これと同じようなことをロータリー財団もやっているのだ、あるいは米山もやっているのだということを会員に理解してもらいますと、そのお金の使い方も含めてよく分かってもらえます。それから米山のお金の使い方一つ疑問に思うのは、皆さんの会費の中に、米山の普通寄付が入っていると思うのです。そもそも寄付を会費の中に入れるのは、僕は反対なのです。会費というのはその性質上、払わなければ除名になってしまうわけです。でもその中に寄付が入っているということは、寄付を強要しているという考えになります。この件につきご意見が伺えれば幸いです。

もう少し自分が奉仕事業に参加して、あるいは自分たちでやってみて、汗をかいてみて初めて、本当の奉仕ということが僕は分かるような気がいたします。地区から奨学生をクラブに突然紹介するというようなことではなく、本来は自分たちのクラブで自分たちの周りから候補者を見つけ、試験を受けてくださいというのが我々の役目だと思うのです。そういうことを通じ、一人ひとりが「本当に奉仕をしたい」という気持ちをもたなければ、ただお金を集めてお金を出しているだけはいけないと思います。以上です。

**司会進行**：ガバナーどうぞ。

**松宮氏**：発言ありがとうございます。ちょうどこれに対しまして、一つ、二つ前の深川先生の発言に、標準クラブ定款の第9条「絶対的な自治権の規定」と国際ロータリー定款第3条の「直接監督権の規定」とをうまく調和すること、つまり協調ということがありました。クラブに自治権がある、もう一つ、RIに直接監督権というものがある、そういう中でどういう態度をとっていけばクラブとし

てはいいのか。そこで一つの例として増強のことを上げられましたけども、増強の例はまだまだ取り組みやすいのです。いまおっしゃっているような、そのクラブが、具体的なニーズを見つけて展開をした、その活動が会員にはよく見える、経過についてもどうしていくかということの説明し会員も理解した。このようなことを、財団や米山奨学会ではやっているのですよ、と。単に寄付しているのではなくて、そういうことに使われているのですよ、ということを示すのだとお話でした。これはクラブのあり方としては本当に模範的だと思います。その一方で、寄付金が会費に入っているのは、基本的におかしいわけです。そうしますと普通寄付5,000円という地区の要請に対しまして、茅ヶ崎中央は1,000円に答える。そういうことがあるわけですね。で、そういう場合には私はですね、たしかに理解がいただけないのであれば1,000円でいいと思うのですね、クラブの判断として。勿論会費と寄付という問題は積み残しのままで

すが。私としては、例として青少年交換活動というものも、元来クラブが推薦して、クラブとクラブとの関係で成立していくものであって、地区でやっているというものではないというところを今年度はどうしても具体的に見ていただきたい。クラブが主体的にやっている活動にもかかわらず、結果として地区からやらされているように見えるのは、これは、当事者のちょっとした誤解の集積としてそんな具合になっている、そこをもう一度見直してもらいたい。それぞれのクラブがしっかり判断していただいたうえで、やはり協調するところは協調してゆく。その努力があれば、結果として先ほどの普通寄付を、たとえば5,000円に近づけるような展開をクラブがしてくださるだろうと思いますね。その前提になるような、こちら側の(要請する側の)態度というものが必要なのだらうと、具体的

な場面では、そんなことを考えております。戸田さんいかがですか? 非常に具体的な話で恐縮なのですがぜひご意見をいただければ。

**司会進行**：どうぞ。マイクをお願いします。

**戸田氏**：第2580地区直前ガバナーの戸田一誠です。私は、今までのパネラーの皆さんのご意見を伺い、会場からのご発表のご意見を伺って、私自身もずっと思っていたことなのですが、結局、堅苦しくいえばロータリー情報教育が欠落してしまった。この何十年間かの中に、私たち自身が変質しつつあるという意識を持っています。特にこの20年間に入会した方々の多くが、対外的な社会奉仕をしないと奉仕活動をしてないのだというような不満を持っていたらっしゃる。私は、ロータリーの最大の功績というのは、精神的な境地を高めあうことによって、地域社会や国際社会により優れた人間を送り出していっていることがロータリーの最大の奉仕活動だと思っているわけなのですけども。

RIが集金機能に目覚めて金を集め始め、同時にその大きな奉仕プロジェクトを始めるとどうも決議23—34号が邪魔になってしまいう。手続要覧の記載を、目隠ししてしまう時期がありましたよね。結局、日本や韓国、タイのロータリアンの大きなうねりが決議23—34号をまた表に引っ張り出してきたような印象を持っています。けれども、どんな大きな社会奉仕プロジェクトを手がけても、それがロータリーの目的ではない。あくまでもロータリアンを養成するための手段・方法でしかない、という認識を私たちはきちんと持たなきゃいけない。そういう意味では、やはり私は1969年に入会いたしましたけれども、その当時からす



で「ロタキチ」とか「ロータリー屋」という非常にいやらしい言い方がありました。私はまあ、その言葉の表現どおりの方も中にはいらしたかもしれないけれども、毎週毎週時間をとられて、年間数十万円の年会費を払って、在籍している組織に対して、私たち会員自身がそれに見合っただけの熱意を持って臨んでいるかということ、とって大事なことだと思います。そういう意味では、やはりロータリー情報教育というところと堅すぎるかもしれませんけれども、私は一人ひとりももう一度ロータリーを学び直すことによって以外、ロータリーの再生はもしかすのではないのか。実は歴史的にはパラダイムの転換がいま起こりつつあってですね、対外奉仕活動に対する姿勢をきちんと規定するならば、それはそれで不満な人もいないけれども受け入れざるを得ない。何の路線変更かをきちんと明確化しないまま、うやむやな形でもって大型の社会奉仕活動を次から次へと積み重ねていくということに対して、私は多少ならず不満を持っています。

**司会進行：**ありがとうございました。田中先生、いかがでしょう。今のご意見ご指摘に対して。

**田中氏：**そうですね。よくロータリーの原点に戻れ、原点に戻れと言いますが、1905年2月23日に戻ってしまったら、ロータリーは単なる親睦団体でしかあり得ない。ロータリーがすばらしい発展を遂げた一番大きな原動力は、次から次にすばらしい才能を持った指導者が現れて、ロータリー運動に対していろいろな付加価値をつけていった。それをその時代のロータリアンが理解し、実践していった。それが、ロータリーが発展していった原動力だと思うのです。その中で、他の奉仕団体とは違う一番大きな特長は、「職業奉仕」という概念を持ったことではないかと思えます。だからその「職業奉仕」という概念を私たちは理解しないとダメだと思うのです。一方、欧米系ロータリアンの中ではほとんど「職業

奉仕」が語られることは無くなってしまいましたが、やっと、この2、3年、いわゆる途上国から、RI会長が出てきて「職業奉仕」のことに触れられたことは、非常に嬉しいことです。

私は文献を集めるために、RIの資料室を何回も訪れました。シェルドンの名前を言っても誰も知りませんでした。そこで、"He profits most who serves best"を作った人だと言ってたら、ああそうかっていって彼の文献を出してくれました。「職業奉仕の理念」はシェルドンが開発したのです。そして、RIの国際大会においてそれを原文のまま採択したのです。シェルドンの言っている「職業奉仕」とは何かということを知らずして、私たちは「職業奉仕」を語ることはできないのです。現在のロータリーはシェルドンの存在を忘れ、歴史的に価値あるものを尊重しないで、実利主義一辺倒でいっている。いわゆるボランティア活動の団体に移ってしまっている。その辺のところが一番大きな問題があります。今日はオフィシャルな会合ですから過激な発言は避けませんが、原点にもどるのではなく、歴史を大切にしながら、ロータリーが経てきた思考過程をもう一度考え直しながら、進んでいかないと、数あるボランティア団体の中に埋没してしまうのではないかという危険性を強く感じています。ですからやはり職業奉仕を基本に置きながら、ロータリー運動を展開していく必要があるのではないかと思うわけであります。

ちょっと余談になります。いま、私たちは現実にロータリーの奉仕活動に参加しているという感覚があまりないのではないのでしょうか。というのは、これは日本人の悪い習慣なのですが、お金を出すことによって、奉仕活動を実践したという錯覚を起こすのですね。

私は、実は子供がアメリカに住んでいるのでしょっちゅう向こうへ行きます。2、3年前に行ったときに、ある小さな片田舎の町で

市役所の駐車場を借りて、ロータリーのマークを付けて植木市をやっていたのです。「何の資金作り？」と尋ねると、WCSのプロジェクトの一環なのですね。日本だったらお金を出して、それで終いです。彼らはそのWCSのプロジェクトを通じて、会員同士の親睦を深めていこうと考えたわけです。ですから、その年度の初めに国際奉仕が提案して理事会が決定したのでしょう。草花の種を全会員に配って、それを会員の家で育てて、立派に成長した草花を駐車場で売って、そのお金をWCSの原資にしているのです。

その過程で多くの親睦が生まれてくるのですよ。計画から資金の調達、完成まで、みんなで行った。そして、このお金を持って、WCSのプロジェクトを実施するために、みんなで南米に行くのだと言っていました。それだけのクラブの奉仕活動を実践したらロータリーは楽しいですよ。

1,000円か2,000円出してお終いという感覚、私は絶対反対ですね。昨日も社会奉仕のセミナーで申し上げたのです。ほとんどのクラブの年次報告書を見ると、社会奉仕活動の中に「XXに協賛」とか、「XXに協力」と書いてあるのですよ。まあせいぜい協力したって1万円くらいでしょう。グレン・キンロスは言っています。「既存団体に寄付する行為だけは絶対止めるべきである。どんなに小さいプロジェクトでもいいから、計画、募金、実施までを一貫性を持って行うべきである。」と。

その態度が日本のロータリーには欠けていると思います。私はアメリカのロータリーのやり方に対して批判していますが、そういった行動的な面では尊敬すべきところがいっぱいあるのです。だから、日本は第2のロータリー大国、財団寄付だって第2位だと言われて、それで万歳ではなく、すべてのプロジェクトに直接参加する姿勢が大切です。

ポリオの一斉投与があったって日本人はほ

とんど参加しませんよね。しかしそういうところへ出かけていくという態度が必要なのです。ロータリーの哲学は実践理論の哲学ですから、理論をしっかりと固めると共に実践にも積極的に参加する必要があります。この双方が揃って初めて、ロータリー・ライフが楽しくなるのではないかなと思います。

**司会進行：**ありがとうございました。他にご意見ご質問等ございませんか。はい、どうぞ。

**道下氏：**第2500地区バスターガバナーの道下でございます。戸田さんの話から、だんだん今日のテーマの「ロータリーを再認識しよう」に近づいておりますので私からちょっと発言させていただきます。

あるロータリーの有力者が「2020年にはロータリーは消滅しているだろう」、そんなショッキングな話をしたのであります。確かにロータリーは今、衰退してきております。会員も減ってきております。そして金集め、そして人集めが本筋のようなロータリーになって、ロータリー哲学を失ってきているということに悲しんでいる、私はそういうロータリアンの一人であります。

昨日、深川先生がセミナーで「ロータリーは何か」、「ロータリーの本筋は何か」ということをお話しになりました。いまはそのあたりには触れませんが、ロータリーというのは一業種一人の職業分類と例会出席の義務で100年の歴史を築き上げてきたと思うのであります。そして、もちろん職業人の集まりでありますから、商業道徳の高揚、高い倫理を追及するということにロータリーはやぶさかではなかったのであります。

そして、そこでロータリーの綱領ができました。ロータリーの綱領におきましてもやっぱり「職業奉仕」が強調されております。そしてそれを具体的に展開するのに11ヶ条のロータリー倫理訓が出て参りました。さらにロータリー初めての文献としてガイ・ガンディカーが「ロータリー通解」を書きました。日

本人としては古沢丈作氏が大連宣言を出してきたのであります。たしかにそのあたりのことは、かつてI・G・Fでも盛んに論議され、ロータリーを討議する材料として最重要のものでした。思えばロータリーが正に最盛期を迎えていたのであります。ところがロータリーというのは1983年のスケルトンRI会長あたりから非常におかしな傾向が出て参りました。

というのは、彼は人頭分担金の値上げを提案したが反対された。そこで彼は会員増強に走ったのであります。会員増強に実績をあげたクラブ、ガバナーを表彰する。そして彼は手続き要覧の中から決議23—34号を消したのであります。そして手続き要覧の中から「個人」という項を消したのであります。この決議23条—34号は後に蔵並RI理事がこれを復活させたのでありますが、大きな功績だったと私は思うのであります。が、そのときにロータリーに「ギブアンドテイク」という発想があるのか、会長賞プログラムに大半の批判が集まったのであります。

そしてさらに財団というのは肥大化してきて、そして「人道的プログラム」、「教育的プログラム」と多様化してまいりました。ポリオ・プラスも加わってまいりました。そうすると財団の財源が必要になってきました。それで財団への協力、それから会員の増強、この二つを公式訪問でガバナーが言えば、ほとんどのガバナーの義務が終わるという時代もあったのであります。

そういうことから考えますと、それを軌道修正しようとしたRI会長もだんだん出てきたのであります。カドマン元RI会長は「あなたは鍵です」という、そして、あなた方一人一人がロータリーの鍵を開けてくれと。アビー元RI会長は、今のロータリーは20%のロータリアンが80%のロータリアンの仕事をしている。この80%がロータリーに参加してくれるならばロータリーはもっと栄えるだろうということを書いておりました。それから'87

年のケラー元RI会長は「過去40年間理事会で職業奉仕を語られることはなかった」ということで、職業奉仕委員会を立ち上げました。カドマンRI元会長も、「ロータリーを知らない幾千ともいえる会員が、ロータリアンになってくれるならば人道的プログラムは今より何倍もできる」ということを言って、軌道修正を図ったのであります。

最近ではラビツァ元RI会長が、非常にすばらしい会長だったと私は思うのであります。が、「ロータリーの魅力を失ってきたところにロータリーの衰退がある。そして私が歩いてみたところ、草の根ロータリアンと執行部とのギャップが極めて大きいということに気がついた。私はそのギャップを埋めるために努力したい」とおっしゃったのであります。ロータリーの魅力というのは何であったのか。テリトリーの厳しさ、一業種一人の会員制、例会出席の義務、それから14段階におよぶ会員入会の審査だったのであります。それが、深川先生がおっしゃいましたけれど、だんだん崩れていった。そこにロータリーの衰退が始まったと私は思うのであります。

さらに最近ではビチャイ元RI会長、それから、ジョナサン・マジアベ元RI会長も「職業奉仕こそロータリーの原点である。ロータリーで職業奉仕をもう一回見直そう。そうすればロータリーは強くなる」ということを、非常に強く私たちに訴えられたのであります。昨年のブリスベンにおけるインスチチュートで、サブ元RI会長は非常に厳しいことをおっしゃいました。私たちに向かって。「ロータリーは倫理運動である」、昨日深川先生もそう強調されました。「ロータリーは自分の職業を通じて地域の人々に大きな影響を与えることができる。高い職業倫理を持つことをロータリーは求めているし、それを創立以来理念としてきた。自分の職業、それからグループで職業倫理水準を維持することができなければロータリーを退会しろ」とまでいわれた。

そして「新入会員には職業奉仕を説け。それがロータリーの歴史であるから」ということを彼は強調されたのであります。非常に厳しい口調でありましたが、私は久々にロータリーを聞いた思いです。ですから、今日のテーマの「ロータリーの理念を再認識しよう」について、私は「ロータリーの歴史に学べ。そして、職業奉仕こそロータリーの原点である」ということに立ち返って、職業人として地域の人々の間に「信用と信頼」こんな短い言葉で職業奉仕は表現できると思うのであります。この関係を確立してロータリーを地域に生き返らしていくことこそ、ロータリーのこれからの私たちのやることだと思っているのであります。それで21世紀のロータリーの繁栄はつながっていくだろうと、そのことを考えていることを申し上げまして私のお話を終わりたいと思うのです。私は、昨日今日とこの大会に参加させていただきまして、会長代理にも申し上げたいのですが、松宮ガバナーの地区大会に、すばらしい大会に参加させていただいたことを感謝したいと思います。ありがとうございました。

松宮氏：ありがとうございました。

司会進行：ありがとうございました。

おっしゃるとおりと思います。松宮ガバナーはほんとうに道下パストガバナーのおっしゃるようなことを実施したいと思っております。

それから先ほどのお話の中にありました当地区の元RI理事・蔵並パストガバナーが、私たちがロータリー活動の心のよりどころにしている決議23—34号、これを堅持することに努力なさった。そして今度の規定審議会では、本日のパネラー田中パストガバナーが第2モットーの件でご活躍なさったとお聞きしているのですが、そのあたりのお話を少ししていただけますか。

田中氏：蔵並パストRI理事が決議23—34号を死守されたお話しをお聞きしまして、すごいなと思っていました。図らずも、私が今度代

表議員として、"He profits most who serves best"を何とかして守らなければならないという立場になりましたので、蔵並先生に負けないように頑張ろうと思いました。

今日は時間の関係で十分説明ができませんが、この"He profits most who serves best"というシェルドンの言葉は非常に深い意味を持っているのです。はっきり言えば「ビジネスは科学である。科学には法則がある。その法則に則った事業運営をしていけば、あなたは必ず継続的な利益を得ることができる。」ということなのです。

科学的な事業運営は結果として倫理的なものですから、それに満足した顧客は必ずリピーターとして何度も訪れることになるし、新規の顧客も紹介してくれます。そうすれば事業は発展していきます。あなたの事業が発展していく様子を、同業者の方が見れば、必ず同業者の方はそれを真似します。そうすれば、業界全体のモラルが上がっていきます。ロータリーがやっている奉仕活動の受益者は、全部ロータリアン以外ですが、職業奉仕の受益者だけはロータリアンなのです。その職業奉仕の基本となる言葉が"He profits most who serves best"であると、シェルドンは述べているのです。

私はRIの本部に行きまして、調べた結果、1910年、11年、13年、21年とシェルドンの論文は4つあることを発見しましたが、特に21年の『ロータリー哲学』と称する論文は、人が知る論文であります。これを読めば彼が何を考えているのか、シェルドンの職業奉仕理念の集大成とも言える、すばらしい論文であることが分かりました。

ロータリーの歴史を調べると、1930年頃までは一所懸命に、職業奉仕の理論構築と実践を進めた形跡があるのですが、たぶん完成したと思ったのでしょうか、30年を越した頃から、その作業を止めてしまいました。RIの職業奉仕委員会も48年から86年まで約40



年間なくなって、その後やっとRIの職業奉仕委員会が復活したと思ったら、シェルドンの職業奉仕理論とはまったく違う、「ロータリアン個人として、ロータリークラブとして職業奉仕活動実践をする。」というとてもない指針を出すものですから、皆さんが混乱してしまいました。ロータリークラブが行う職業奉仕活動とは何か。職場訪問とか、優良従業員表彰とか、職業奉仕と関係のないことをしてお茶を濁すようになってしまった。そんな形が、現在続いているわけであり。その際1年間だけ職業奉仕委員会を再開して、また翌年からなくなって現在に至っています。現在、RIの指導者の頭の中には、シェルドンが述べた職業奉仕という概念はまったく無くなっていることは非常に残念なことです。そのすべてを述べている言葉が"He profits most who serves best"ですから、これは大切なモットーなのです。

ロータリーには2つのモットーがあります。"Service Above Self"これは人道主義に基づく奉仕活動のモットーであり、"He profits most who serves best"は職業奉仕のモットーだと思っています。この2つのモットーが対になっているからこそ、ロータリー運動は成立するのです。そのうちの1つである"He profits most who serves best"を止めてしまうということは、ロータリーから職業奉仕理念を抹殺することなのです。この事態を日本の代表議員の皆さん方は深刻に考えました。RIの理事でいらっしゃいます菅生さんと田中（作次）さんがおられるので、心苦しかったのですが、"He"を"One"に変えるというRIの提案には反対いたしました。女性に対して失礼だから"He"を"One"に変えるという単純な問題ではなく、シェルドンの述べる職業奉仕理念を尊重するには、どうしてもその原文を尊重する必要があるからなのです。"He"とか"Man"という言葉には「人類全般」を指す意味が含まれているとしても、女性が

入会した以降に、あえて"He"を使うのは非常に失礼であることは分かります。でもそれ以前にできたドキュメント、ステートメントは、これに敢えてこだわるべきではないと思います。予想通り、RIの方から"He"を"One"に変えると提案が出ました。多分これは通るであろうと予測していましたが、それに対抗するために、「ロータリーとして歴史的に重要なドキュメント、ステートメントは原文を尊重すべき」という提案を私たちの地区から提出したわけです。

"One"にすべきか"He"にすべきかという審議の最中に、いっそのこと"They"にしたらいという修正案が出ました。私はびっくりして、「ロータリーは"I Serve"の世界であり、ライオンズは"We Serve"の世界である。"He"を"They"に変えるということは、ライオンズとロータリーとの間に区別がつかなくなるので反対だ。」と言ったのですが、現在欧米系のロータリアンで、"I Serve"と"We Serve"の違いを感じる人はほとんどなく、この予想外の修正案が、あっさり通ってしまい、結局、"One profits"は否決されて、"They profit"に変わってしまいました。

"He profits most who serves best"を廃止しようという提案につきましては、あんまり腹立たしかったものですから、私と第2650地区の宮崎さんと共に反対演説をしまして、「もしもロータリーからこのモットーがなくなるようだったら、良質な日本人のロータリアンが大挙して退会するだろう」と脅しをかけました。

皆さんびっくりしましてね、やはりたまには脅しをかけなければいけないのですね。ということでこの提案は否決されました。

最終日、第二モットーの"He profits"が"They profit"に変わったままでは大変だということで、第二モットーの原文を絶対守るべきだという趣旨説明を私がしました。日本の代表議員も台湾の代表議員も一致協力して

応援のスピーチをしてくださいました。そうしたら最後に、2001年の規定審議会の委員長ダクターマン元会長がグリーン賛成札を持って立ち上がり、「ロータリーは歴史を大切にしなければならない。当然のことである。日本人のロータリアンがこんなに"He profits most who serves best"を守っていかうと思うのだったら守ってもらっていいじゃないか。誰もそれに反対するものはいない」という名演説をぶってくださいました。

そういう形でこの提案は414票対82票の大差でもって通りました。ですから今の段階では、"One profits"は否決され、"They profit most who serve best"と"He profits most who serves best"の2つが並存するという形になっています。今後これをどうするかを、RIの理事会が決定することになります。どうぞ田中RI理事さん、よろしく願いいたします。規定審議会では、なんとかこの第二モットーを残すことを死守しましたので、全日本のロータリアンのためにこのモットーを原文のまま残していただきますようによろしく願い申し上げます。ありがとうございました。（注：2004年10月のRI理事会において、正文である英語を使用する際は、They profit・・・を、各国語使用の際はその国における慣例訳でよいということになりました）

司会進行：深川先生、会場の方から出たお声とか、田中先生の今のご発言等で何かもしご発言があれば。

深川氏：先ほど道下先生が名演説をなさいましたので、私としては、付け加えることもありませんが、一言だけ申し上げます。先ほど戸田さんがロータリーの情報教育が欠落している。これがロータリーをおかしくしている最大の原因だということをおっしゃいました。

私も全く同感でございまして、やはりロータリアンの情報教育が欠落して行くと、どうということになるかと言いますと、結局は、クラブ自治権が崩壊して行きます。

先ほど茅ヶ崎中央ロータリークラブの方が、「会費と寄付とは峻別すべきだ、会費の中に寄付金的な要素が入るのは反対だ」と言われました。私は、大賛成でありまして、このような事は絶対にあってはならないのであります。それにも拘わらず、堂々とまかり通っているのがロータリーの世界なのであります。これもやはりロータリーの情報教育というのが欠落したためだろうと思うのであります。

このロータリーの情報教育というものは、昔のロータリー、特に戦前のロータリーは非常に行き届いておりまして、情報教育は、ガバナーが情報教育をするのではなく、各ロータリークラブがまさに「自分たちのクラブは自分たちで守るのだ」というクラブの自治権に基づいて自分たちのクラブを教育していったのであります。したがって、その辺のところがおざりになったために、全てのことが間違った方向へ行っていると思います。

私の経験で1つ事例を紹介しておきたいと思えます。昔、私の友人が神戸ロータリークラブに入会しました。当初、彼は、神戸クラブのような堅苦しいところへ入るのは嫌だと言っていたのでありますが、推薦する人が非常に熱心でありまして、結局彼は説得されて、それでは入会しましょうということになりました。推薦者は大変喜びまして「それじゃあ明日の朝9時に私の会社へ来い」と言ったのであります。

そこで、彼は、約束の9時に会社へ行きました。そうしますと、朝9時から延々とロータリーの講義が始まったのであります。「ロータリーの歴史」、「ロータリーの原理」、「ロータリーの実践」などについての話が夕方4時まで続いたのであります。昼飯は御馳走してくれましたが、とにかく延々と約7時間にわたってロータリーの講義を聞かされて、彼はうんざりしました。しかし、彼は、このまま聞きっぱなしで帰ったら悪いと思って1つ質問をしました。そうするとその推薦者は

「お前はまだ何にも判っていないからもう一度明日の朝来い」ということになりました。それで、また翌朝9時から4時までロータリーの講義を聞かされて、それでやっと入会を許されたと言って笑ってっていました。

何故ここまで厳しくするのかという問題があります。それは「自分達のクラブは自分達で守る」。ロータリーの理解のできない異質な人が例え一人でもクラブの中に入ってくると、何億円にも替え難いほど大切なクラブ親睦というものが崩壊してしまう、自分達のクラブが崩壊してしまうということがありますから、1人の会員を入会させる場合にも、徹底的に教育をして、この人ならば自分達の仲間にしても間違いはないと確信した上で入会させているのであります。このような伝統があったからこそ、素晴らしい神戸ロータリークラブが育っていったと思うのであります。

今、ここまで会員の入会に際して厳正な教育をしているクラブは見当たりません。ほとんどないだろうと思います。したがって、この辺のところも私たちは反省すべきだと思っております。もう一つの例を紹介しておきます。

黒沢張三パストガバナーがおられる東京南クラブであります。このクラブは、例会場の正面にグリーンのテーブルクロスを掛けたテーブルが2つあります。他のテーブルは、全て白いテーブルクロスであります。そのグリーンのテーブルクロスの掛かったテーブルには、どういう人が座るのかと言いますと、入会后6カ月以内の会員が必ずそこに座します。そして、そのテーブルには、元会長とか情報委員長とかパストガバナーとか、とにかくロータリーの経験の深い人が、何人か座って毎週口コミでその新入会員を教育していくのであります。そして、6カ月経つと、やっと我々の仲間だということで、一般の白いテーブルへ移ります。このようにして、ロータリアンを教育しているのであります。

5、6年前に黒沢先生に「まだ、あれやっているのですか？」と聞きましたところ、先生は、ニコニコしながら「やっていますよ。ただ、最近、クラブを教育する人を教育しなければならなくなってきた。それでもいい、喜ばしいことです」と笑っておられました。

やはり、クラブの自治権を守る、クラブの自主性を守るためには、クラブ自体が真剣に一人ひとりを教育し、育てていくという意識がなければ、ロータリーはどんどん衰退していくだろうと思うのであります。この辺のところは大変な重要なことですので一寸申し添えた次第であります。

**司会進行：**ありがとうございました。素晴らしい話が次から次へと出てきたところですが、進行の拙さで予定の半分も達していないうちに時間が来てしまいました。申し訳ありません。それでは松宮ガバナー、3分くらい締めのお話を。

**松宮氏：**やっとうこうなんか盛り上がってきたところで終わらなければならないのが非常に残念です。けれども、片やもう一方のご意見というものもあるだろうと思います。会場の中では「えー、結局そんな方向だけの話でいいのかな」という思いもあるでしょう。で、それが本当は現実のロータリーであろうと思います。そここのところはまた後半のガバナー公式訪問で、どんどん私を鍛えていただければと思いますのでどうぞよろしくお願いします。

それにしましても、お二方のパネリストの、示唆に富んだお話をいただきまして私としては大感激でした。

会場の戸田さん、道下さん、どうもありがとうございました。現実的な話をしていただいた堀川さんにも大いに感謝いたします。どうもありがとうございました。

**司会進行：**ありがとうございました。誠に残念ですが、これをもってシンポジウムを終了させていただきます。どうもお疲れさまでございました。